

アイヌ語再活性化の現状

中川裕（千葉大学人文社会科学研究所）

アイヌ語の母語話者が現在何人くらいいるのかという質問に、正確に答えられる人はおそらくいない。少なくとも言語習得期にアイヌ語だけで生活していたという人は、もういないだろうし、かりにいたとしてもその数がゼロになるのは時間の問題である。そして、日本語を母語として生活してきてすでに成人してしまったアイヌ人が、これから母語としてアイヌ語を取り戻す可能性はゼロに近い。それは危機言語と呼ばれるものが共通して進んでいる道である。しかし、その現状を悲観的なものとしてのみとらえるのは、母語というものに対する信仰、それを絶対視する思考の産物である。

それに対して私が提唱したいのは、「母語」（カッコつきの母語）という概念である。「母語」とは、自分のアイデンティティと結びつけ、自分のものとして考える言葉である。それは現在ひとことも話せなくともよい。ただ、それを自分の言葉として少しでも覚えたい、身につけたい、使いたいという意思があり、それに向かって行動しているなら、それはその人にとっての「母語」である。そして、そういう意味でのアイヌ語の「母語」話者は、今増加しつつあるというのが、アイヌ人に対するアイヌ語教育に20年以上関わってきた私のいつわらざる実感である。

たとえばアイヌ文化振興・研究推進機構で主催しているアイヌ語弁論大会「イタカンロー」の参加者は、1997年にはたった12名だったのが、2009年には52名に増え、レベルも上がっており、参加するのを楽しみにアイヌ語の勉強をしている人たちが、私のまわりにも何人もいる。会場の雰囲気も大変よい。

また、若いアイヌ人で、積極的にアイヌ語に関わろうとする人たちが増えていることも、近年において目立つ現象である。特に、音楽や芸能の分野で、OKI、Marewrew、Ainu Rebelsなどが、アイヌ語を楽曲の中やパフォーマンスで使っていく活動を試みており、昨年10月に発足したTeam Nikaopというグループも、古い芸能の掘り起こしという作業を通じて、アイヌ語のパフォーマンスを行っている。そして、これらのグループが20代、30代のアイヌ人を中心としたものであることは、未来に向けておおいに意味のあることである。

アイヌ語の再活性化にはアイヌ語の威信を高める必要があり、そのためには、社会を多様な形でアイヌ民族とアイヌ語に関わらせなければならない。それはアイヌ人自身だけではなく、マジョリティの側が動く必要のあるものである。その一環として、アイヌ文化研究を志すアイヌ人学生を優先入学させて、授業料等の補助等も行おうとする札幌大学のウレシパという事業は注目すべきである。今話題のFFXIIIというゲームの中で、Ainu Rebelsの酒井美直氏がアイヌ語で歌を歌っているということも、もっと宣伝されてよい。そうした多方面からの様々な取り組みこそが、アイヌ語の活性化につながるものであり、我々にとって重要なのは、そうした活動を阻害するような振舞いを慎んで、彼らを応援することである。